

〔劇評〕

新国立劇場『トロイ戦争は起こらない』

田ノ口誠悟

2017年秋、ジャン・ジロドゥの『トロイ戦争は起こらない』が新国立劇場で上演された(10/5～10/22、中劇場。演出：栗山民也、主演：鈴木亮平)。使用されたテキストは上演と時を同じくして出版された岩切正一郎氏による新訳であり(岩切正一郎訳『トロイ戦争は起こらない』ハヤカワ演劇文庫)、旧訳(『ジロドゥ戯曲全集』、白水社)が出版されたのは1950年代後半だから、相当久しぶりの新たな日本語による上演であった。

ジロドゥは、日本で最も舞台上がるフランス語圏の劇作家の一人である。劇団四季がジロドゥを愛した詩人加藤道夫の遺志を受け継ぎ、継続的に『オンディース』や『間奏曲』、そして『トロイ戦争～』を上演して来たことは広く知られているし、民族対立、宗教対立といった人類に普遍的な問題を真正面から扱うその作風は、多くの新劇の演出家達を惹きつけて来た。ゆえに今回の新訳による、新国立劇場の規模千人のホールでの再演に、開幕前から大きな期待を寄せていた方々も多かっただろう。

そして実際に、新国立劇場の『トロイ戦争～』は、これまでとは全く違う斬新なジロドゥであった。まず驚かされたのは、その舞台装置、舞台衣装である。原作は古代ギリシャを舞台にしているが、演出の栗山氏はこの設定を「第三次世界大戦開戦前夜とでも言うべき(…)私たちの生活とも地続きな何処か(註)」という、いわば近未来的な時間軸に置き直した。舞台は円形の闘技場のような場所であり、その周りを、黒褐色の巨大な壁が、あるいは螺旋を描く円形の通路が取り巻いている。そして俳優達はみな、モノトーンの、どこかエキゾチックなマントを羽織っている。この無国籍の世界観は、原作戯曲を大戦間期フランスという局地的な歴史から解放し、東京の観客に、主題であるトロイ人とギリシャ人の戦争をヴィヴィッドな問題として提示する事に成功していた

と思う。

また、非常に凝った音響効果、照明効果にも驚かされた。全編を通じて吠えるように鳴り響くヴァイオリン、ギリシャ・トロイ首脳間の平和条約締結会議の時に背景に映し出される日の丸のような深紅の照明、さらには幕が降りた後、すなわち「トロイ戦争」が起こったあと、暗闇に浸された観客の耳をつんざく戦車やヘリコプターの爆音。おそらく、長い『トロイ戦争～』上演史の中で、これほど壮麗なスペクタクル的演出は、初めてだったのではないか。

そして、俳優の皆さんの演技には、みずみずしいエンターテインメントとしてのジロドゥ劇の新しい側面を感得させられた。本公演では、パリ初演時に上演されなかったいくつかの喜劇の場面も完全に上演されている。例えば、当時の国際連合の風刺とおぼしき事大主義の国際法学者ビュジリスの場面や、少年少女の登場人物(「トロイリュス」と「小さなポリクセース」とギリシャの王女エレヌスが戦争に関する冗談を言い合う場面である。作品全体としてみれば、これらの場面はいささか冗長とも言える箇所だが、現在の演劇界、映画界の第一線で活躍される俳優の方々の手によって、この上なく魅惑的なコミック・リリーフに変化を遂げていた。そしてその祝祭的な雰囲気の中で、ヒロイン・アンドロマックを演じた鈴木杏の文学的演技は、生鮮な印象を放っていた。彼女は、ジロドゥの台詞の微妙なニュアンスを見事に掬いとり、それを透き通った力のある声で会場全体に一つの詩として響かせていた。

最高に危機的でありながら、最高な楽しさに溢れた21世紀のジロドゥ。これからも、このようなジロドゥの新演出を見たいと思う。

(註) 栗山民也「この鈍感な時代の中で、何を語り続けていくのか」、『新国立劇場 トロイ戦争は起こらない パンフレット』、8頁